

大学生が災害ボランティアに参加するプロセスの検討 -常総市の災害ボランティアを対象として-

Examination of the process of college students to participate in disaster volunteer
-Joso-city district as an example-

○小宮 賢祐¹, 糸井川 栄一²
Kensuke Komiya¹ and Eichi Itoigawa²

¹ 筑波大学大学院システム情報工学研究科 博士前期課程

Master's Program in Faculty of Engineering, Systems and Information, University of Tsukuba.

² 筑波大学大学院システム情報工学研究科

Faculty of Engineering, Systems and Information, University of Tsukuba.

After the Great Hanshin Earthquake, the role of disaster volunteers became important. Recently, the move which promotes university students' participation has been spreading. This study aims to increase the number of student participant therefore conducted the questionnaire to the students of the Uni. of Tsukuba which is close to Joso city where was stricken by the torrential rain in 2015. As a result, it turned out that three factors promoted participation. Those are; enhancing eagerness, providing an opportunity and eliminating the barrier for participation.

Keywords : Disaster volunteer, rehabilitation work, university student

1. はじめに

阪神淡路大震災以降、被災地の復旧において災害ボランティアは重要視されるようになった。災害ボランティアには比較的若者が参加する傾向があることが報告されており、特に大学生の活躍が目立つ。阪神淡路大震災の際に活動した人の約4~6割が大学生であったと報告されており、東日本大震災の被災地域においても、大学生が災害ボランティアとして参加し、地域の復旧に貢献したことでも報告されている¹⁾。さらに、東日本大震災以降は、学習成果を活かす機会や将来の担い手としての期待から、文部科学省²⁾がこれを支援する姿勢を示しており、災害ボランティアに大学生が参加することは、社会にとっても本人にとっても意義のあることである。

ボランティア活動への参加意欲に着目した研究として、木野³⁾の研究がある。この研究は、東日本大震災からの復旧の際に活動した宮城県内の大学生の参加者と不参加者の両者を調査対象とし、ボランティアへの参加意欲の高さが参加行動に関係することが明らかにされているが、参加意欲の高め方は検討されていない。

桜井⁴⁾は、東日本大震災からの復旧の際に活動した関東と関西の大学生を対象に、大学生のボランティア参加に影響を与える要因を調査している。しかし、明らかにした要因は学生の学部等の個人属性や、過去のボランティア活動の経験の有無であり、具合的な参加促進への提言や、参加意欲との関係性は明らかにされてはいない。

また、谷口ら⁵⁾、山口ら⁶⁾では、全国の住民を対象に、Web調査によって、東日本大震災への現地ボランティア活動の参加有無や、参加者を対象に参加のきっかけ、不参加者を対象に不参加の理由が明らかにされており、中には学生に焦点を当てた考察もみられ、学生は他者からのきっかけで参加する傾向があるということ、また概し

て参加の障壁があつて参加できていない人がいるということが報告されている。しかし、参加行動が顕在化する前の参加意欲との関係性は検討されておらず、効果的なきっかけの提供方法や障壁の提言方法などに課題が残る。

以上の観点から本研究では、まず最初に大学生の現地ボランティア活動に対する参加意欲がどのような要因の影響を受けているかをボランティア参加に関する論文より抽出した上で、学生へのヒアリング調査を通して精選する。その後のアンケート調査をもって、参加意欲に影響する要因と、参加意欲の高さに応じた参加のきっかけおよび不参加理由の関係性を明らかにする。その上で、具体的なきっかけ等の提供の方策を検討し、より多くの大学生が現地ボランティア活動に参加するようになる方策を提言することの一助とする。

2. 常総市のボランティア参加に関する調査

(1) 調査対象

本研究では、2015年東北・関東豪雨によって被災した茨城県常総市における災害ボランティアを対象事例とし、調査対象者は筑波大学の在学生としている。

9月に発生した関東・東北豪雨災害によって、鬼怒川が決壊し常総市は甚大な被害を受けた。

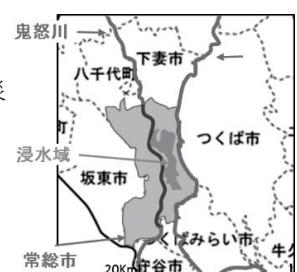


図1 被災した常総市の位置

また、筑波大学のHP⁷⁾より少なくとも400人の筑波大生参加者がいることが明らかであり、災害ボランティアへの参加者の抽出が容易であると考え対象とした。

(2) 筑波大学へのヒアリング調査

まず、最初に筑波大学の被災地に対する援助の考え方や、学生が現地ボランティア活動に参加することの意義を大学側の視点で把握するために実施した。

表1 筑波大学へのヒアリング調査の概要と結果

ヒアリング概要	
調査対象	筑波大学総務部総務課(リスク管理)
日時	2015年 10/22 10:00 ~ 11:00
目的	災害時の大学の対応、大学の地域貢献 常総市に派遣した学生数、その他課題など
ヒアリング結果	
設問1	筑波大学の援助の方針、また近隣地域が被災した場合の対応はどのようにになっているのか
回答1	<ul style="list-style-type: none"> 大学が被災地を支援することは、大学の地域貢献、社会的責任として重要な取り組み 大学外が被災した場合の対応は検討されておらず、今回の支援も被災後に対応を検討 常総市のように日頃から連携していると、災害時の対応が早くなる
設問2	大学生が災害ボランティアに参加することについてどのように考えているか
回答2	<ul style="list-style-type: none"> 大学生の時期に災害ボランティアに参加することや、被災地を見ることなどは、今後の人生に役立つ経験を得る機会でもあるため、参加してほしいと考えている 現在はHP更新や、掲示板を利用しているが、ボランティア募集などの情報を大学生に届ける方法がわからない 災害ボランティアに派遣する際の問題として、活動中などに怪我をしてしまった場合の責任問題が挙げられる

以上のヒヤリング調査から、次の3点が明らかになった。

- 被災地への支援やボランティアは、大学としては地域貢献、学生としては人生経験として非常に意味のあるものであると考えている。
- 近隣地域の被災時に前もって準備をしていることはないが、普段から繋がりがあれば連携しやすい。
- 災害ボランティア派遣等の促進においては、学生への情報提供の方法がわからないことや派遣先での負傷責任が問題としてあり、今後のためにも解決に向かう必要があると考えられる。

(3) 筑波大学の学生へのヒアリング調査(プレ調査)

大学生の災害ボランティアへの参加プロセスを明らかにするにあたり、災害ボランティアに関する論文を調査した上で、筑波大学生へのヒアリング調査を実施し、参加行動が顕在化する前の参加意欲に影響を与える要因を抽出した。

表2 既往研究の整理

著者	年度	対象	参加行動との関係性をみた項目
浅川ら ⁸⁾	1998	大学生	共感性
佐々木 ⁹⁾	1999	大学生	共感、距離など
安藤ら ¹⁰⁾	1999	市民	主観的規範、コスト評価など
谷口ら ⁵⁾	2012	市民	SC、地域活動、アクティビティなど
桜井 ⁴⁾	2013	大学生	学部、性別、過去の経験など
山口ら ⁶⁾	2014	市民	参加のきっかけ、縁、個人属性
木野 ³⁾	2014	大学生	参加意欲、イメージ、経験

表3 筑波大生へのヒアリング調査

調査対象	筑波大生22名
日時	2015年10/19.20
ヒアリング目的	常総市のボランティアへの参加有無、参加意欲、意欲に影響を与える要因の抽出など

上記の検討から、ヒアリング調査等より参加意欲との関係性として次の状況が考えられ、それぞれ仮説1~3として設定した。

- 災害ボランティアへの参加意欲の高低には「過去の経験、被災地の空間的認識、常総市に関して入手していた情報、被害を見聞きして抱いた感情、豪雨災害への考え方、災害ボランティアへの考え方」が影響してくれると考えられる。
- 参加意欲の高低で参加のきっかけが異なる可能性があり、参加意欲が高いほど勧誘的なきっかけ、中程度だと断りにくいきっかけで参加し、低いと参加しないと考えられる。
- 参加意欲の高低で不参加の理由が異なる可能性が受けられ、参加意欲が高いと移動手段・情報がないため、低いと面倒・興味がないという理由で参加しておらず、共通して、時間に余裕がないという理由がみられた。本研究では不参加理由を参加の障壁として扱い参加・不参加者両者に調査している。

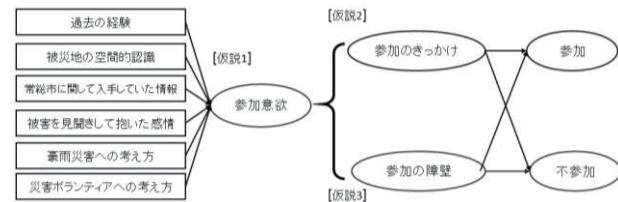


図2 設定した3つの仮説(番号は仮説番号に対応)

(4) 筑波大学の学生へのアンケート調査(本調査)

上述の仮説の検証を行うアンケート調査を実施した。参加した学生のサンプル数を分析に耐えうるだけ抽出するため、参加した学生がいると把握していた研究室などにも直接お願いをしている。また、参加意欲は「発災直後の」ものを調査している。

表4 学生へのアンケート調査の概要

調査対象	筑波大学・筑波大学院に在籍の学生
配布・回収方法	授業、研究室、部活・サークルにて配布・回収
調査実施期間	2015年12月7日～12月21日
配布票数	644票+Web調査分
回収票数	584票(90.3.6%)+11票(Web調査分)

a. 災害ボランティアへの参加意欲と参加行動の関係

図3より、既往研究と同様に参加意欲が高いと参加する傾向がある。しかし、参加意欲のみでは参加行動を説明できず、参加のきっかけや障壁を同時に見る必要がある。

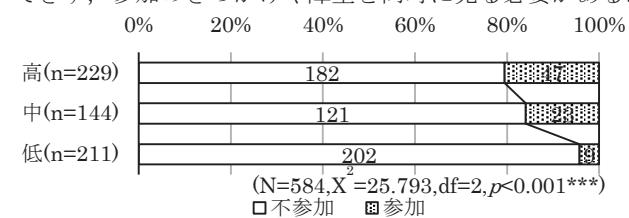


図3 参加意欲の高さと参加行動の関係性

b. 参加意欲の高さに影響を与える要因(仮説1)

① 過去の経験と参加意欲の関係性

図4からは、過去に被災地への支援を直接・間接問わずした経験がある学生ほど参加意欲が高いことが明らかになった。つまり、被災地支援に元々興味がある学生もしくは、過去に支援を経験することで次回の機会の際に参加意欲が高くなるという2つのパターンが考えられる。

また、災害ボランティアに関する授業の経験が参加意欲を高めていることから、教育課程にて、災害ボランティアに関連する授業を展開していくことが望ましいと考えられる。

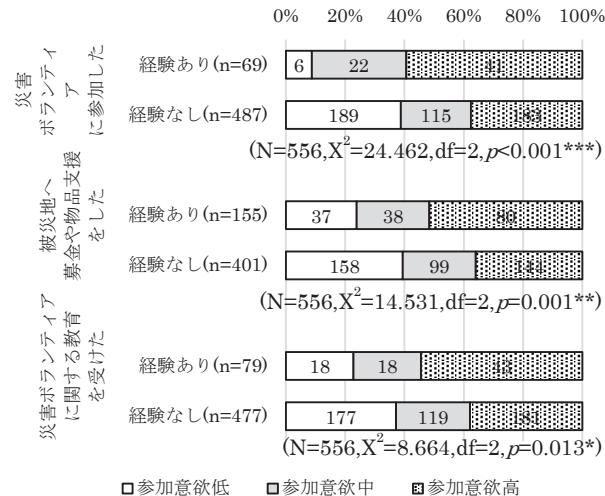


図4 過去の経験と参加意欲の関係性

② 豪雨災害への考え方と参加意欲の関係性

図5,6より、豪雨災害の被害を自分も受けたと思っている、また豪雨災害の影響をよく理解している学生ほど、参加意欲が高くなることが明らかになった。このことにより、豪雨災害のことをよく知つてもらうことで、参加意欲を高めることができる。前述したよう、災害ボランティアに関する授業の有効性を指摘したが、同時に災害についての内容も扱うことで、さらに意欲を高めることにつながると考えられる。

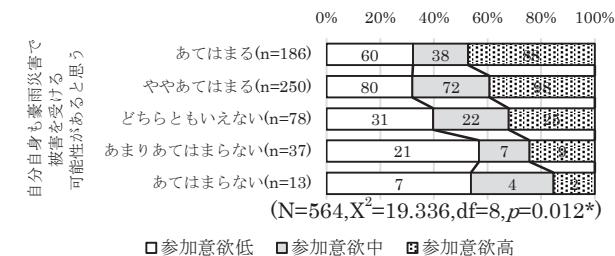


図5 豪雨災害へのリスク認知と参加意欲の関係性

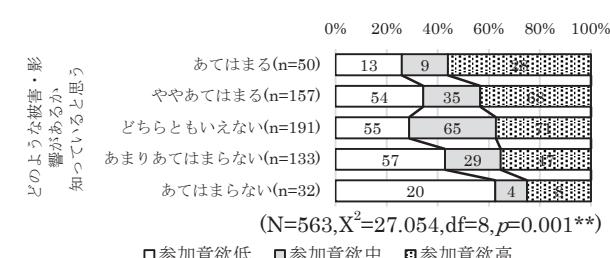


図6 豪雨災害の影響の理解と参加意欲の関係性

③ 被災地の空間的認識と参加意欲の関係性

図7,8より、被災地と居住地の距離が近い学生ほど参加意欲は高いが、同じ茨城県内に在住であっても、距離の遠近感覚は個々で異なり、同じ地域であっても心理的な距離を近くに感じることがより参加意欲を高めることにつながる。

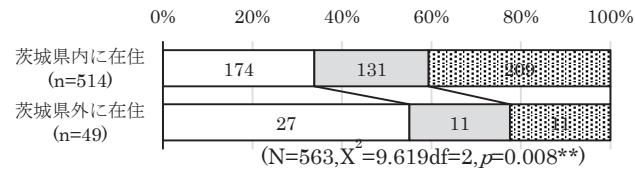


図7 居住地域と参加意欲の関係性

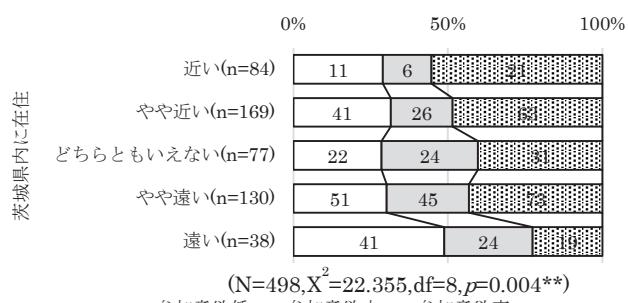


図8 被災地までの距離感覚と参加意欲の関係性

この他にも、「被災を見聞きして抱いた感情」からは、被災を他人事にしないことが参加意欲の高さに繋がり、「災害ボランティアへのイメージ」からは、やりがいのイメージを持っていると参加意欲が高くなり、負担のイメージを持っていると参加意欲が低くなることが明らかになった。

c. 参加意欲と参加のきっかけの関係性(仮説2)

図9より、参加意欲が高い、中程度の学生は、友人・先輩後輩・サークルの活動で参加しているが、参加意欲の低い学生は仲間の誘いでは参加せず、先生・研究室の声かけという比較的の断りにくい理由で参加している傾向がある。よって、参加意欲の高さによって参加のきっかけが異なっていることより、意欲の高さに応じた参加のきっかけを提供することが必要であると言える。

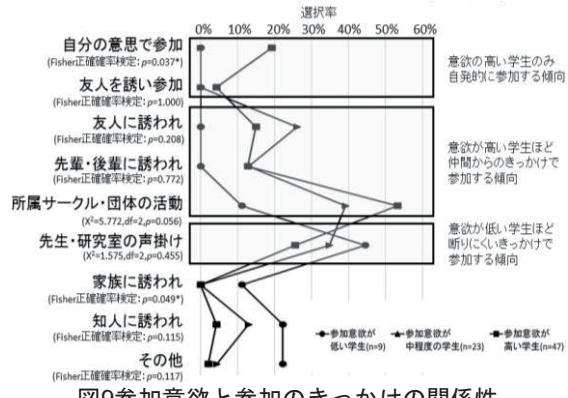


図9 参加意欲と参加のきっかけの関係性

d. 参加意欲と参加の障壁の関係性(仮説3)

図10より、参加意欲高い・中程度の学生は、移動手段や情報のなさを参加の障壁としているが、参加意欲の低い学生は理由なく不参加であることより、やはりまずは意欲を高める必要があると言える。時間のなさは参加意欲に関係なく共通して障壁となっている。

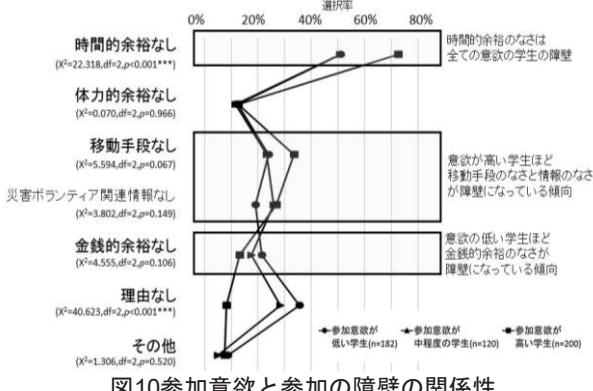


図10 参加意欲と参加の障壁の関係性

e. 参加意欲と参加しても良い条件の関係性

図11より、参加意欲の高い学生ほど「参加しやすい環境」を求めており、参加意欲に関わらず「仲間との参加」と「参加にかかるコスト低減」を希望している。また、参加意欲の低学生は「単位が取れる」や「賃金が支給」といった見返りを求める傾向にある。

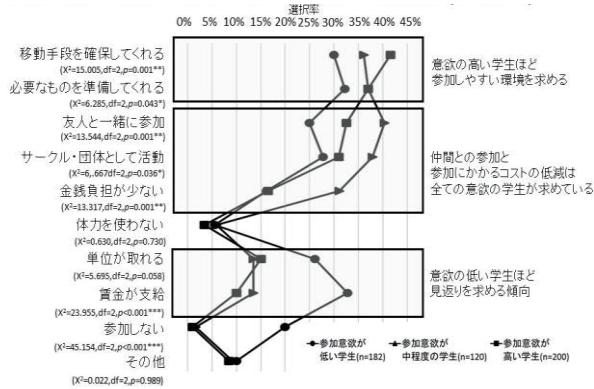


図11 参加意欲と参加しても良い条件の関係性

3.まとめ

(1) 参加意欲を高めることで参加する学生が増える

既存の研究と同様の結果が確認された。今回の結果からも参加意欲が高いと必ずしも参加するというわけではなく、きっかけの提供等の必要性がみてとれた。

(2) 参加意欲の高め方について

過去に援助した経験があると参加意欲が高まることより、元々興味があるとも考えられはするが、兎に角1度参加してもらうと、今後の災害ボランティアの必要性が発生した際には高い参加意欲を持つと考えられる。

また、災害ボランティアに関する授業の実施も効果的であると明らかになった。授業内では、災害ボランティアの活動内容、また肯定的な面を多く伝え、「やりがいがある」と認識してもらうことが重要であり、災害ボランティアにとどまらず、自然災害のリスクについても教えていくことが災害ボランティアへの参加意欲を高める上では効果的であると言える。

そして、被災地との「距離」も参加意欲には影響をしてきており、近隣に居住している人ほど参加意欲は高いのだが、中でも被災地までの距離を個人が近いと思うかどうかも大切であり、長距離移動手段の保有の有無も関係してくると考えられる。この心理的な距離感をどう縮めていくかについては、今後検討を深める余地があると言える。

(3) 参加意欲に適したきっかけの提供と障壁の低減

参加意欲の高低によって、参加のきっかけや参加の障

壁で参加しないこと、参加しても良い条件に違いがあることが見受けられた。より多くの学生に参加してもらうためには全ての施策を実施すれば良いのだが、それは非現実的であるため、表7のように参加意欲の高い学生にまずは参加してもらえる環境を作ることが良いのではないかと考える。ただ、施策によってはボランティア活動の無償性から逸脱する場合もある。

また、大学へのヒアリング調査で明らかになった今後の検討課題として、まずは大学生への情報発信がある。発信方法として、今回参加した人がいたチャネル、例えばサークルや研究室を用いた告知等が有効ではないかと考えられる。また、学生派遣時の怪我の責任も検討課題であり、例えばボランティア活動経験が豊かなアドバイザーの雇用であったり、事前に学生の親族への説明等が必要になると考えられる。また、日ごろから地域と、協定を結ぶまではいかずとも、ある程度連携しておくことは、災害時の早期支援につながることもわかつており、地方に立地する大学の地位貢献になる。

また、本研究の課題としては災害ボランティアへの再参加行動も明らかにする余地があるということがある。対象者の点では、他大学への調査や大学生以外の様々なライフステージの人への調査もする必要があると言える。

表5 大学が実施する参加促進施策

順序	対象者	きっかけの提供	参加しやすい環境づくり	
-	意欲の極めて高い学生	自発的に参加する		
1	意欲の高い学生	仲間同士の誘いを喚起する	移動手段、道具の確保 →大学が提供	
		→サークルに依頼など	参加にかかるコストの低減 →飲食物の準備など	
2	共通して			
3	意欲の低い学生	断りにくいきっかけ提供 →先生、研究室に依頼	災害時専用の授業を設定 →災害ボランティア演習	

参考文献

- 鈴木 勇, 菅 磨志保, 渥美 公秀 : 日本における災害ボランティアの動向 阪神・淡路大震災を契機として, 実験社会心理学研究, Vol. 42 (2002-2003) No. 2 P 166-186
- 東北地方太平洋地震に伴う学生のボランティア活動について」(平成23年4月1日, 文部科学副大臣通知)
- 木野 和代 : 東日本大震災に関するボランティア活動への参加を左右する要因の検討, 宮城学院女子大学研究論文集第118号 2014.6
- 桜井 政成 : 東日本大震災における大学生の被災地・被災者支援行動, 立命館人間科学研究, 28.55-65.2013
- 谷口 守, 山口 裕敏, 宮木 祐任 : 他地域に対する市民レベルの援助実態とその参加要因に関する研究-東日本大震災をケーススタディとして-, 公益財団法人日本都市計画学会 都市計画論文集, Vol.47 No.3 2012年10月
- 山口 裕敏, 土居 千紘, 谷口 守 : 災害時における他地域に対する自発的援助の存立要因に関する考究: 東日本大震災を対象として, 都市計画論文集 49(3), 303-308, 2014
- 筑波大学HP, <http://www.tsukuba.ac.jp/news/n201509111800.html> (最終閲覧日: 2015年10月26日)
- 浅川 潔司 : 大学生の共感性とボランティア活動の関係, 学校教育学研究, 10, 89-93.
- 佐々木 美加 : 阪神大震災における援助行動-共感、危険認知が援助行動に及ぼす影響-, 東北福祉大学研究紀要, 24, 17-50.1999
- 安藤 香織, 広瀬 幸雄 : 環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因, 社会心理学研究 第15巻第2号 1999年, 90-99